



(2024年3月28日発行)

日本口腔顔面痛学会理事長 小見山 道

広報委員会担当理事 山崎 英子/委員長 池田 浩子

今回は2024年2月23-24日に行われた第53回日本慢性疼痛学会について、日本大学松戸歯学部口・顔・頭の痛み外来 小見山 道先生、川崎市立井田病院歯科口腔外科 村岡 渡先生、九州大学病院顎口腔外科口腔顔面痛外来 坂本 英治先生、広島大学大学院医系科学研究科 歯科麻酔学研究室 土井 充先生、明海大学歯科麻酔学分野 大野 由夏先生に報告していただきます。

第53回日本慢性疼痛学会参加報告

明海大学 歯科麻酔学分野 大野 由夏

2024年2月23-24日に、栃木県足利市のあしかがフラワーパークプラザで行われた第53回日本慢性疼痛学会に参加した。日本慢性疼痛学会は1982年発足の歴史ある学会である。約700名の医師、歯科医師、薬剤師、看護師、理学療法士、鍼灸師など多職種の会員からなり、あらゆる側面から慢性疼痛について検討を行い自由闊達に会員同士の意見交換ができるアットホームな雰囲気が特徴である。今回は、参加した小見山先生、村岡先生、坂本先生、土井先生からご寄稿いただき、あわせて報告する。

【会長講演「医療とスティグマ」】(報告：坂本 英治先生)

大会長山口 重樹先生(獨協医科大学麻酔科学講座)の会長講演「医療とスティグマ」で第53回日本慢性疼痛学会は幕を開けた。スティグマとは烙印、レッテルなどと訳され、少し負のイメージをまとう言葉だ。悪い意味での先入観と捉えるとイメージしやすいかもしれない。慢性疼痛患者の負っている様々な負の側面をスティグマと称されていた。不安に苛まれている、自己肯定感が乏しいなど、慢性疼痛患者が抱えるスティグマは、がんサバイバーや薬物依存のそれに似ていると述べられた。

「医療とスティグマ」の会長講演から始まり、LGBTQ、ウクライナ支援、こころみ学園運営のココファームワイナリー見学と、大会を通じての多彩なプログラムは痛みの話に限定されていなかった。それは山口大会長の目指される大会のベースに流れる多様性への答えだと理解した。多彩な症状、多彩な背景の痛みの患者には私たち医療者に多様な視点が求められることをこの多彩なプログラムから示されていると理解した。

【特別講演1「医療現場におけるLGBTQの現状と課題」】(報告：坂本 英治先生)

座長：牛田 享宏 先生(愛知医科大学医学部 疼痛医学講座)

演者：渡邊 歩 先生(NPO 法人共生社会をつくる性的マイノリティ支援全国ネットワーク)

LGBTQの方の話の話を伺う機会はこれまでなく、衝撃的だった。自身の性を保つための医療費は自己負担、自身が病気になったときにどうなるのか不安に常に苛まれている。通常でも適切な医療環境に置かれていない、など枚挙のいとまがない。その社会的スティグマゆえにLGBTQの皆さんの抱えている苦悩は慢性疼痛患者のそれに近い、あるいはさらに大きなものの様にも思えた。フロアからも「自分の慢性疼痛患者さんはまだ恵まれている」といった言葉もあった。

私も気がつかないうちに傷つけたりしているのかもしれない。知らなかっただけでは済まされないことや、当たり前を感じていることが当たり前ではないことがあるのかもしれないと感じた。

LGBTQの方たちが生きやすい世の中は、きっと誰にでも優しいはずである。その先には慢性疼痛、さらには年齢を重ねて身体に不具合が生じたときの私たち自身につながると言っても過言ではない。

演者はフロアからの質問に対して丁寧に答えられ、常にLGBTQのことを意識しているだけでいいです、自分

もとても勇気が入りましたが、わかってくれる医療者がこうして増えてくれれば本望と述べられていた。私も患者から打ち明けてもいいと信頼が得られるようになりたいと強く感じた。

【特別講演3 痛覚変調性疼痛と ADHD－『風と共に去りぬ』の著者マーガレット・ミッチェルの事例から学ぶ】（報告：村岡 渡先生）

座長：水野 泰行 先生（関西医科大学 心療内科学講座）

演者：笠原 諭 先生（東京大学医学部附属病院 麻酔科・痛みセンター／福島県立医科大学 疼痛医学講座）

演者自身の複数の論文より、痛覚変調性疼痛の代表疾患である線維筋痛症（FM）においては ADHD（注意欠如多動性障害）が 25～80%に併存し、ADHD 治療薬が疼痛を有意に改善したことが示された。そして、「風と共に去りぬ」の著者マーガレット・ミッチェルは、FM であったと報告されており、伝記からは ADHD と考えられるエピソードが多くあったことから、DSM-5 において混合型 ADHD と診断できたとのお話があった。講演の最後では、「もし彼女が ADHD 治療薬による治療を受けていたら…」と締め括られていた。

【共催ワークショップ】（報告：小見山 道先生）

座長：伊達 久 先生（仙台ペインクリニック）

「慢性痛に対する認知行動療法：認知行動モデルによる悪循環のアセスメント」

演者：細越 寛樹 先生（関西大学社会学部社会学科心理学専攻／国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター）

演者の細越先生から、人間は認知・感情・身体・行動の 4 側面で反応しており、各要素の反応やその相互作用を捉えていく CBT モデルについて、個人がどのようなことを考え（認知）、どのような気持ちが生じ（感情）、どのように身体が反応し（身体）、結果としてどのようにしているのか（行動）の 4 側面に分けて解説された。慢性疼痛の場合、治療の主目的は痛みを 0（ゼロ）とすることではなく、生活の質（QoL）や日常生活動作を向上させることである。その点を患者によく理解していただき、痛みがなければやりたいことや、痛みの憎悪を恐れて思うようにできなかった／諦めた場面を CBT モデルで捉え直し、特徴的な悪循環のパターンを治療者と患者で共有し、認知または行動に介入することで、悪循環を改善し QoL の向上を図った臨床例を複数解説され、大変参考になった。

また臨床研究で使用している、8 回の認知行動療法コースのテキストとマニュアル、ワークシートがダウンロード（DL）できるようになっており、細越先生の名前で検索し DL して、生かしていただきたい旨の説明があった。実際に DL したが大変参考になる資料であった。

【シンポジウム3 精神科医が語る慢性疼痛】（報告：村岡 渡先生）

座長：田代 雅文 先生（熊本市市民病院 麻酔科）

西木戸 修 先生（昭和大学横浜市北部病院 緩和医療科）

演者1：井原 裕 先生（獨協医科大学埼玉医療センター こころの診療科）「疼痛と孤独」

演者2：大平 天平 先生（東京女子医科大学付属足立医療センター 心療・精神科）「うつ病と慢性疼痛」

演者3：大石 智 先生（北里大学医学部精神科学）「認知症と慢性疼痛」

3 名の精神科医が「疼痛と孤独」、「うつ病と慢性疼痛」、「認知症と慢性疼痛」について講演を行った。「孤独」、「社会的孤立」が様々な身体に健康に影響している可能性、「うつ病」は痛みの長さに関連があること、「認知症」は痛みのケアがおろそかになりやすいことなど、特に慢性疼痛と関連が認められていることを多くの論文をもとに解説された。

ハーバード大学精神科医 Robert Waldinger の TED talks 「What makes a good life? Lessons from the longest study on happiness」の紹介があった。幸福とは何か？についての 75 年に渡るプロジェクト研究の 4 代目リーダー

一のプレゼンテーションである。「人との繋がり」「良い人間関係」が大切であるとのことが紹介されているので、ぜひ You Tube でご覧下さい。

https://www.ted.com/talks/robert_waldinger_what_makes_a_good_life_lessons_from_the_longest_study_on_happiness

【シンポジウム「口腔顔面痛の会」】（報告：大野 由夏）

座長：小見山 道 先生

演者1：村岡 渡 先生「口腔顔面痛診療の現状とその問題点」

演者2：坂本 英治 先生「『痛い』と訴える難治性慢性口腔顔面痛患者の本当の『痛み』とは？」

演者3：土井 充 先生「パーソナルリカバリーを目標とした口腔顔面痛診療」

本シンポジウムは日本慢性疼痛学会においてはじめて開催された「口腔顔面痛の会」であり、本会における小見山理事長をはじめ、演者および会員の先生方のご活動の賜物である。

座長小見山先生の司会ではじまり、村岡先生から「口腔顔面痛診療の現状とその問題点」について解説いただき、続いて坂本先生から「『痛い』と訴える難治性慢性口腔顔面痛患者の本当の『痛み』とは？」と題し口腔顔面痛患者の痛みについてご紹介いただいた。最後に土井先生から実際にどのように診療しているか、「パーソナルリカバリーを目標とした口腔顔面痛診療」と題してお話しいただいた。

会は大盛況で多職種の方々にご参加いただき口腔顔面痛に対する興味が大きいことを実感した。とくに総合ディスカッションでは伊達 久先生（仙台ペインクリニック）から抜歯後疼痛の患者にどのタイミングでカルシウムチャンネル $\alpha 2\delta$ リガンド製剤の投与を開始して良いかご質問があり、我々も再考する機会を頂いた。また口腔顔面痛診療に影響を与える点として患者が医療者とのトラブルを引きずっていることも多く、坂本先生と土井先生のご講演はそれをどうやって紐解いていくか、というお話であったのでは、というコメントが小長谷光先生（明海大学歯科麻酔学分野）からあった。

多職種の方とディスカッションし口腔顔面痛診療の発展につなげる機会として、来年以降の本シンポジウム出席が楽しみになった。



総合ディスカッション（オンデマンド配信動画より）



盛況の会場



シンポジウム終了後の充実した笑顔の先生方
(左から村岡先生, 小見山先生, 坂本先生, 土井先生)

【ランチョンセミナー2】(報告:小見山 道先生)

座長:山口 重樹 先生(獨協医科大学 医学部麻酔科学講座)

アセトアミノフェンと集学的診療 –中枢感作を鎮めよう–

演者:三木 健司 先生(大阪行岡医療大学医療学部/早石病院 疼痛医療センター)

演者の三木先生から, 令和5年10月12日にアセトアミノフェンの「消化性潰瘍のある患者, 重篤な血液異常のある患者, 重篤な腎障害のある患者, 重篤な心機能不全のある患者, アスピリン喘息又はその既往症のある患者」に対する禁忌が解除され, NSAIDs使用困難な患者にも適応可能になり, 作用機序はまだ完全には解明されていないが, 中枢感作への効果が示唆されていると説明があった. またNSAIDsは服用後20~40分で効果が発現するが, アセトアミノフェンは中枢性効果なので数時間必要であり, 用量依存性なので以前の1500mgまでの使用制限では解熱作用のみで, 鎮痛効果の発現には成人で2400~2800mg程度必要などの使用上の要点も説明された. 今後のアセトアミノフェンの臨床研究の進展に期待したい.

さらにワークショップ形式で隣の聴講者の方と慢性疼痛患者との会話についてロールプレイを行い, 傾聴, 受容, 共感の後に, 患者さんに「そうなんです～」と言ってもらえれば成功でその後の治療もうまく進められるが「でも～」と言われたらうまくいかないという臨床場面での医療面接の実践方法は, ごく簡単に説明されたが大変納得できるものであった.

【ランチョンセミナー4】(報告:土井 充先生)

座長:飯田 宏樹 先生(中部国際医療センター 麻酔・疼痛・侵襲制御センター)

带状疱疹関連痛の病態と治療法 ~带状疱疹の予防と带状疱疹後神経痛への対応から考える~

演者:境 徹也 先生(佐世保共済病院 ペインクリニック麻酔科)

2018年に承認された遺伝子組み換え型サブユニット带状疱疹ワクチンであるシングリックスの有用性について紹介があった.

2ヶ月間隔で2回の筋肉注射が必要で, 費用も4万2千円と高価だが, 带状疱疹発症の予防効果は98%ぐらいと, 弱毒性水痘生ワクチンと比べて圧倒的に高い効果があるということであった. 带状疱疹後神経痛の予防効果としても85%ぐらいでとても有用性の高いワクチンであることが分かった. ただし, 副反応はそれなりに認めるようで, 筋肉痛(4割)や発熱(2割)は多めで, 注射自体はとても痛いということであった.

長期効果もあり10年経っても80%超で持続していると報告されているようだが, 演者の境先生は10年に1回ぐらいの間隔でワクチンを打つことを勧められていた.

ワクチンの助成が受けられる自治体はまだまだ少ないが、増えてきているようである。

80歳までに3人にひとりになるといわれている帯状疱疹を10年4万2千円で予防できると考えると決して高くない買い物なのかもしれない。

美味しいうなぎ弁当をいただきながら、予防について考える貴重な時間を過ごした。

【特別企画：足利におけるワイン酒造の現状】（報告：土井 充先生）

特別企画のワイナリー見学にも参加した。

そこは200人ぐらいが入所する障害者施設・こころみ学園により運営されるワイナリーであった。創業者・川田さんのお孫さんの雄弁な語りで、その歴史が紹介された。

こころみ学園の名前の由来は、試みた、やってみた、ということで、私財を投じて山の急斜面の土地を購入し、知的能力障害を持った生徒たちと雑木林を開墾してブドウ畑を作ってみた、酒好きが高じておいしいブドウをワインにしてみた。創業者のやりたいことをやってみる豪快さを感じられる人物像はとても魅力的に感じられた。

最後にはワインの試飲もあったが、その中の一つ「風のルージュ」は2008年北海道洞爺湖サミットの総理夫人主催夕食会で使用されたということであった。

当日は朝から雪の降る寒い1日であったが、心温まる話とワインで満たされる夕暮れを過ごした。



ぶどう園



醸造所



カフェ



ワインの夕べ

（左から土井先生、坂本先生、小見山先生、小長谷先生）

【会員懇親会（ワインの夕べ）】（報告：大野 由夏）

大会長山口 重樹先生（獨協医科大学麻酔科学講座）一押しの会員懇親会「ワインの夕べ」では、これまでPCの向こうにいらした多くの先生方とディスカッションに華を咲かせることができた。

本大会ではほかにも魅力あるプログラムが多く行われた。また、専門職のシンポジウムとして「口腔顔面痛の会」のほか、看護師の会、心理の会が企画された。それぞれの観点から痛み診療について学ぶことは、今後の多職種連携、学際的痛み診療推進にあたり非常に有意義であると再認識した。

大会長山口先生は早くからオピオイドの適正使用と乱用防止に関する啓発活動などを行ってきたご高名な先生である。日本最古の学校である足利学校のある足利市において行われた本会に参加し、痛み診療に携わる者として思いをあらたにした。

このような機会を頂き、大会長の山口先生、シンポジウム「口腔顔面痛の会」を企画くださった小見山理事長はじめご寄稿頂いた村岡先生、坂本先生、土井先生、関係各所の先生方、皆様にこの場を借りて御礼申し上げる。

本会は慢性疼痛診療に関する知見を得ることができる非常に有意義な会である。ハイブリッド開催で3月31日までオンデマンド配信を行っているので良かったらご視聴いただくとともに (<https://masui-dokkyo.com/53JSSCP/>)、2025年2月22日(土)、23日(日)に仙台市にて伊達 久先生が大会長として行われる第54回日本慢性疼痛学会へのご参加をぜひおすすめしたい。



足利学校

【大野由夏先生のプロフィール】

【略歴】

2003年 東京医科歯科大学歯学部歯学科卒業

2007年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科麻酔・生体管理学分野博士課程修了(博士(歯学))

2009年 Center for Sensory-Motor Interaction (SMI), Aalborg University, Denmark 留学

2011年 Aalborg University, Doctoral School in Medicine, Biomedical Science and Technology 博士課程修了(PhD in Clinical Science)

2013年 独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)新薬審査部 審査専門員

2015年 明海大学歯学部病態診断治療学講座歯科麻酔学分野 准教授



主な所属学会・専門医

日本口腔顔面痛学会 専門医・理事

日本歯科麻酔学会 専門医・理事

日本ペインクリニック学会 特任評議員

日本いたみ財団 いたみ専門医・いたみマネージャー

日本疼痛学会, 日本慢性疼痛学会, 日本麻酔科学会

International Association for the Study of Pain (IASP) (国際疼痛学会) ほか

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp